



航海日記

人

特別
カ5
6012
3



航海日記

三

705
06012
3

<2015-20>



ちやうど世界第一の船中の法武と云ふものも
ハタコ。ローノークの船を以て略す

正午迄 百九十里

北 二十一度二十七分

西 二十一度九十分

正午 七十一度

日十七日 晴 南風 西

今日より船中日 舟人の水きく舟一カ
ルロコに 我れ舟下 舟なる是 吳
人より舟なる一倍多し

正午より 百九十里

北 二十一度二十七分

西 二十一度四分七十分

正午 七十四度

日十七日 晴 南風 成

今日より南風烈し 舟の揺れ強きも 帆
舟の帆舟 舟の揺れ強きも 舟の揺れ
強し スクルフと 水中より 舟

正午迄 二百三十三里

北 二十一度十分五分

西 五十八度四分五分

正午 七十九度

日十八日 晴 南風 成

今日より舟の揺れ強し 舟の揺れ強し
舟の揺れ強し 舟の揺れ強し 舟の揺れ
強し 舟の揺れ強し 舟の揺れ強し
舟の揺れ強し 舟の揺れ強し 舟の揺れ
強し 舟の揺れ強し 舟の揺れ強し

正午迄

二百九十三里

山 三十八度 五十分
西 五十三度 七十分

寒暖 七十一度

日十九日 曇る 午後 晴 風 子

船已のうらむ向てを 船揺れ 未だ 揺れ 夕刻
海庭ふ 船の沈むを 見る 海西の 帆柱 中
水は かんえ され とも 中 揺れ とも 揺れ 船の 別
き 艘の 船 あり 遠く

正午迄 二 三十分 三十分

山 三十八度 十分 寒暖 七十一度

西 四十九度 十分

日廿日 陰 午後 晴 風 丑

一 風の あり 夕刻 船の 側 あり 船 集り 四角
そ 里 入 事 及 西 名 浦 浦 入

午時迄 一 百九十分 三十分

山 三十七度 十分 寒暖 七十一度

西 四十三度 十分 五分

日廿一日 朝 陰 午後 晴 西 風 寅

一 未の 申 別 船 あり 船 集り 船 集り 船 集り 船 集り
蒸気 あり 船 あり 船 あり 船 あり 船 あり 船 あり
合申の 別 あり 船 あり 船 あり 船 あり 船 あり

正午迄 一 百九十分

山 三十七度 十分 寒暖 七十一度

西 四十三度 十分 五分

日廿二日晴東風卯

今朝より吹風ありて無常とあり申候一寒氣
あり申候ハスクルハ車プを水中より上へあり日本
人の船尾を掃除せり

午時ハ 百九十九里

申 二十四度五分五分

寒暖 七十九度

酉 三十一度五分

日廿三日晴東山風辰

此頃より味留船油を有候食料とありあり
りりりり人候とあり是れこの頃の船客
子ウヨルク少あり候食料と候ハありあり
人の船尾を掃除せり

申 百七十四里

酉 二十四度五分

寒暖 七十八度

西 三十一度五分

日廿四日晴東山風巳

船尾に向て去る人候事一不自由ニ有候申候
人候申候ニ公よりあり候事一不自由ニ有候申候
申の別遣ふべき艘の船とあり候事一不自由ニ有候申候
候事一不自由ニ有候事一不自由ニ有候申候

午の時より百八十八里

申 二十四度五分

寒暖 八十八度

西 三十一度五分

日廿五日晴東山風午

一 船の如き艘として、その利便を圖り、あつては、船あり、
只とて、年々、ノキニ、コシ、歳年、お、所、より、カ、ル、ホ、ル、ニ、ヤ、と、自
領、と、し、て、年々、心、を、お、つ、る、に、余、を、外、國、お、多、の、
又、是、境、にお、つ、て、年々、と、お、つ、る、に、各、お、つ、る、お、つ、る、
一、と、お、つ、る、お、つ、る、國、と、し、て、お、つ、る、お、つ、る、
一、と、お、つ、る、お、つ、る、中、と、し、て、お、つ、る、お、つ、る、
お、つ、る、と、し、て、年々、お、つ、る、又、お、つ、る、
一、と、お、つ、る、お、つ、る、又、お、つ、る、お、つ、る、
各、國、と、し、て、年々、お、つ、る、お、つ、る、
一、と、お、つ、る、お、つ、る、お、つ、る、お、つ、る、

西 二十八年 八月 廿九日
西 二十八年 八月 廿九日
西 二十八年 八月 廿九日
西 二十八年 八月 廿九日

一 船の如き艘として、その利便を圖り、あつては、船あり、
只とて、年々、ノキニ、コシ、歳年、お、所、より、カ、ル、ホ、ル、ニ、ヤ、と、自
領、と、し、て、年々、心、を、お、つ、る、に、余、を、外、國、お、多、の、
又、是、境、にお、つ、て、年々、と、お、つ、る、に、各、お、つ、る、お、つ、る、
一、と、お、つ、る、お、つ、る、國、と、し、て、お、つ、る、お、つ、る、
一、と、お、つ、る、お、つ、る、中、と、し、て、お、つ、る、お、つ、る、
お、つ、る、と、し、て、年々、お、つ、る、又、お、つ、る、
一、と、お、つ、る、お、つ、る、又、お、つ、る、お、つ、る、
各、國、と、し、て、年々、お、つ、る、お、つ、る、
一、と、お、つ、る、お、つ、る、お、つ、る、お、つ、る、

西 二十八年 八月 廿九日
西 二十八年 八月 廿九日
西 二十八年 八月 廿九日
西 二十八年 八月 廿九日

一 己の別段に、海軍の軍艦、お、つ、る、と、し、て、年々、お、つ、る、

東の海に平水

日向の海に平水

一 船の東南より北に航するにありて北流と云ふ事
とアノボトと云ふ所の別流より北の別流に流るる
る海西より東の流より一程の東に別流の中心
がニルと云ふ所の流より北に流るる水は北流より
北の海に流るる事

一 年迄 一 年迄

南より北に分

北より南に分

東より西に分

西より東に分

日向の海に平水

一 船の東南より北に航するにありて北流と云ふ事

は下の海に平水あり今昔の月とてとらん凡そ船
は下の海に平水あり今昔の月とてとらん凡そ船
は下の海に平水あり今昔の月とてとらん凡そ船

一 年迄 一 年迄

南より北に分

北より南に分

東より西に分

日向の海に平水

一 船の東南より北に航するにありて北流と云ふ事
とアノボトと云ふ所の別流より北の別流に流るる
る海西より東の流より一程の東に別流の中心
がニルと云ふ所の流より北に流るる水は北流より
北の海に流るる事

一 申の別当庵に航船申ふあつて言樂と養一役砲
と養一外弟利徳の軍艦ふても役砲と航船西の
方と五九と軍中や一層のうとあつて航船の大
砲と養一と因て遊樂と止港のふりり橋舟と弟利徳の
とととと嫌て来るの因て「アヤガウ」あつても橋舟と航
船と一人の舟とあつて海よあつては遊樂と
用事とあつて航船申ふ遊樂のよの調あつ
上港と一航船と一遊樂の因て遊樂と送つて来る
あつても航船は時あつてあつても大砲と養一は
上港と一航船と一遊樂の因て遊樂と送つて来る
と航船申ふ航船あつて遊樂のよの遊樂と一航船と
一遊樂の航船と一遊樂のよの遊樂のよの今と私

申ふ上港と一航船のよの遊樂のよの今と私
遊樂のよの航船と一遊樂のよの今と私

七月那の 是る南風已

一 今朝航船申のよの遊樂のよの今と私
人の神祇を遊樂のよの遊樂のよの今と私
そのよの遊樂のよの遊樂のよの今と私

航船のよの遊樂のよの今と私

南十度と二十分

東十二度と十分

日二の 申港南風午

一 今更に遊樂のよの遊樂のよの今と私
十人の水更とも遊樂のよの遊樂のよの今と私

遊樂のよの遊樂のよの今と私

是よりつらき事ありて三日ありて申り
一筋位ありぬの事ありて三日ありて申り
三日ありて

正午迄 百七十里

南十二度及十九分

北緯中 五緯

東十二度五分

日正 陰向風来

一 船も所より北緯五度ありて夕刻船の側を
とる事ありて何處かのありて大かたつる斗ありて
密ありて

午時迄 百五十五里

北緯中 七十五度

南十二度五分五分

東十二度八分

日正 北南風申

一 船東のうへを海西に去るの事ありて北緯五度ありて
余あり

正午迄 百四十二里

南十二度及二十九分

北緯中 七十五度

東十二度及十四分

日正 北南風申

一 今日午時の北緯五度ありて北緯五度ありて
北緯五度ありて

正午迄 百七十里

南十二度及十八分

北緯中 七十五度

東十二度及十四分

日六日 晴南風夜は雨哉

一 夜子の別より俄く少くも北風強烈なり
船の揺れも甚きなり
少くも北風強烈なり
少くも北風強烈なり
少くも北風強烈なり
少くも北風強烈なり
少くも北風強烈なり
少くも北風強烈なり
少くも北風強烈なり
少くも北風強烈なり

南二十度及二分

東十二度及二分

西十二度及二分

北二十度

日七日 晴南風

一 船の揺れも甚きなり
船の揺れも甚きなり
船の揺れも甚きなり
船の揺れも甚きなり
船の揺れも甚きなり
船の揺れも甚きなり
船の揺れも甚きなり
船の揺れも甚きなり
船の揺れも甚きなり
船の揺れも甚きなり

南二十度及四分

東十二度及二分

西十二度及二分

北二十度

日八日 晴南風

一 船の揺れも甚きなり
船の揺れも甚きなり
船の揺れも甚きなり
船の揺れも甚きなり
船の揺れも甚きなり
船の揺れも甚きなり
船の揺れも甚きなり
船の揺れも甚きなり
船の揺れも甚きなり
船の揺れも甚きなり

南二十度及四分

東十二度及二分

西十二度及二分

北二十度

ケイワグーテオツプと云夕刻一ノ遊氣と云用スクルフを
の申しつて

1940年 1940年

東三十八度三十分

東三十八度三十分

日三十一日 北緯五十五度

船中車道の右に北緯五十五度三十分の緯度を示す
夕刻一ノ遊氣と云用スクルフをの申しつて

1940年 1940年

東三十八度三十分

東三十八度三十分

北緯五十五度

日三十一日 北緯五十五度

今朝船の定まるるに北緯五十五度三十分の緯度を示す
夕刻一ノ遊氣と云用スクルフをの申しつて

1940年 1940年

東三十八度三十分

北緯五十五度

東二十八度五十分

日十四日 晴山風烈午

午時より形風あり 船は速くあり 船は東向きなり

午時迄 一百二十九里

南三十三度三十分

寒風中 六十七度

東三十三度三十分

日十五日 晴山風末

船はありそら船ありそら 風静なり 船は西向きなり
の節揺る 一層の別は遠のたのこふ 水艘の船とそら
日別さびヤヤロウと何言りそら 船は夕刻ありそら
この船と船とそら 和蘭の船あり

午時迄

一百八十里

南三十三度四十分

寒風中 六十九度

東三十三度三十分

日十六日 晴山風中

夕刻東の音あり 船あり

午時迄

二百二十里

南三十三度四十分

寒風中 七十二度

東三十三度三十分

日十七日 晴山風中

午の形あり 船あり 船は西向きなり

午時迄

二百七十里

南三十三度三十分

寒風中 七十三度

東三十三度三十分

日十八日 晴東山風成

一 船の東山の石の上をさしきつて海中より晴海を望みし頃一団の
船の影を望みしものありしなり

二十一日 二日甲

南二十八度五十分

東二十四度十九分

雲層中 二十九度

日十九日 晴東山風成

一 日く波もく船の動揺強くして夜中よりとも夜舟
下海より望みしなり

二十一日 二百十八里

南四十七度七分

東二十八度五分

雲層中 二十七分

日十九日 曇る東山風成 夕刻より西風

一 船東山の石の上をさしきつて海中より晴海を望みし頃一団の
船の影を望みしものありしなり 風西の勢より
烈風より船の動揺強くして夜中よりとも夜舟
下海より望みしなり 氷雪も大粒航程を阻む
強風の勢より船の動揺強くして夜中よりとも夜舟
下海より望みしなり 雲層中 二十七分

二十一日 二日甲

南二十八度五十分

雲層中

二十七分

東四十二度五分

日六日 晴 西山風也

船の東の... 帆を... 帆
が夕れ... 帆... 帆

正午迄 二百二十里

南三十九度五分七分

曇 晴中 五十八度

東四十四度十九分

日六日 晴 西山風也

船の東の... 帆を... 帆

正午迄 二百二十里

南三十九度五分七分

曇 晴中 五十八度

東四十四度五分七分

日六日 曇 西山風也

船の東の... 帆を... 帆
... 帆... 帆

正午迄 二百二十里

南三十九度五分七分

曇 晴中 五十八度

東四十四度五分七分

日六日 晴 西山風也

船の東の... 帆を... 帆
... 帆... 帆

東五十二度 五十四分

日廿七の半晴あり風未

一 今朝半朝露の多し船とるる是史郎國に引船とる
日別おの言は虹とるる辰の別と天賦少是と出る也
海より

西五十二度 五十四分

南五十二度 五十四分

東五十二度 五十四分

日廿八の半晴西風申

一 船とるるは夕よりとるありと晴ありと
海よりとるるは夕よりとるありと晴ありと
大風ありとあり

午の半 五十二度 五十四分

南五十二度 五十四分

東五十二度 五十四分

日廿九の晴西風申

一 今朝半朝露の多し船とるる是史郎國に引船とる
日別おの言は虹とるる辰の別と天賦少是と出る也
海より

西五十二度 五十四分

南五十二度 五十四分

東五十二度 五十四分

八月廿九の晴西風申

西五十二度 五十四分

南五十二度 五十四分

一年の別はトポールスア井うことを遠くあつた遠く我國
 沿岸のち船が航しては昔々人の海の中又海の中は里余
 とまは地が能くあふ能く温泉の國で日出入のあはけ
 海に船とあはせ入湯とせしむるべしと云ふもいふも
 海國と云ふもいふもいふも止又か一編と云ふ海は
 久しとアムステルダムと云ふトポールスア井うこの南緯半
 北度五十分東経七十七度三十分と云ふ也

五年迄 二百十里

七年迄 二百四十里

東七十分南三十分

日二日 晴西少風

順天年一たんありふことポールスア井うことを船があつた云ふ

年の別はトポールスア井う

南三十分南三十分

東八十分南七分

日二日 晴西少風

一 船の別はトポールスア井うことを遠くあつた遠く我國

五年迄 二百十里

南三十分南三十分

東八十分南七分

日四日 陰西北風

五年迄 二百十里

南三十分南三十分

東八十分南七分

五年迄

五年迄

東九十九度四十九分

日八日 晴 東風 已

一 往る途に於て我國の事をいふに 此海西極より 一 往る途に於て 我國の事をいふに 此海西極より 一 往る途に於て 我國の事をいふに 此海西極より

南九十九度二十九分

東九十九度四十九分

日九日 晴 東風 午

一 船中の音をきくは 往る途に於て 我國の事をいふに 此海西極より

南九十九度二十九分

東九十九度四十九分

日十日 晴 東風 未

一 往る途に於て 我國の事をいふに 此海西極より 一 往る途に於て 我國の事をいふに 此海西極より 一 往る途に於て 我國の事をいふに 此海西極より

南九十九度二十九分

東九十九度四十九分

日十一日 晴 東風 申

一 往る途に於て 我國の事をいふに 此海西極より 一 往る途に於て 我國の事をいふに 此海西極より 一 往る途に於て 我國の事をいふに 此海西極より

西平道 二二四里

南平道 二二四里

東平道 二二四里

日土の陸東南風あり

己の別より計略を以てしるべき

午の道 二二四里

南平道 二二四里

東平道 二二四里

日土の陸東南風あり

北の方向を以てしるべき

午の道 二二四里

南平道 二二四里

東平道 二二四里

日土の陸東南風あり

午の道 二二四里
 南平道 二二四里
 東平道 二二四里
 日土の陸東南風あり
 己の別より計略を以てしるべき
 午の道 二二四里
 南平道 二二四里
 東平道 二二四里
 日土の陸東南風あり
 北の方向を以てしるべき
 午の道 二二四里
 南平道 二二四里
 東平道 二二四里
 日土の陸東南風あり

一 辰の上別 船を解つて出少釋と申す申すはてを色の別を
 按答費^{バクアビヤ}並淺く入陸し甲申と隔て船をとり一船を止
 淺く川の舟の和蘭船を止し岸向を以て淺く一乗
 の乗あ乗船ふとるにありて高國の岸熱を不四乗とよ
 高多のこを釋し一高をさると信を又稱えりとて一乗
 一乗は船の乗あをさると高多一乗は船の乗あをさると高多の
 海をさると高多一乗は船の乗あをさると高多一乗は船の
 一乗は船の乗あをさると高多一乗は船の乗あをさると高多の
 船多の船の乗あをさると高多一乗は船の乗あをさると高多の

二 廿七日 晴寒

一 辰の上別 船を解つて出少釋と申す申すはてを色の別を
 按答費^{バクアビヤ}並淺く入陸し甲申と隔て船をとり一船を止
 淺く川の舟の和蘭船を止し岸向を以て淺く一乗
 の乗あ乗船ふとるにありて高國の岸熱を不四乗とよ
 高多のこを釋し一高をさると信を又稱えりとて一乗
 一乗は船の乗あをさると高多一乗は船の乗あをさると高多の
 海をさると高多一乗は船の乗あをさると高多一乗は船の
 一乗は船の乗あをさると高多一乗は船の乗あをさると高多の
 船多の船の乗あをさると高多一乗は船の乗あをさると高多の

二 廿八日 晴卯

一 辰の上別 船を解つて出少釋と申す申すはてを色の別を
 按答費^{バクアビヤ}並淺く入陸し甲申と隔て船をとり一船を止
 淺く川の舟の和蘭船を止し岸向を以て淺く一乗
 の乗あ乗船ふとるにありて高國の岸熱を不四乗とよ
 高多のこを釋し一高をさると信を又稱えりとて一乗
 一乗は船の乗あをさると高多一乗は船の乗あをさると高多の
 海をさると高多一乗は船の乗あをさると高多一乗は船の
 一乗は船の乗あをさると高多一乗は船の乗あをさると高多の
 船多の船の乗あをさると高多一乗は船の乗あをさると高多の

日 四日 陸軍部 陸軍

一 船隻の... 小輪... 多量...

山崎

山崎

山崎

山崎

一 船隻... 運... 電...

山崎

山崎

山崎

山崎

一 船隻... 運... 電...

山崎

山崎

山崎

山崎

日七の 陸雨車凡周

一 船の... 能... 集

五平 1500

五平 1500

五平 1500

日八の 陸雨車凡周

一 船の... 能... 集

五平 1500

五平 1500

五平 1500

日九日 中陸雨車凡周

一 船の... 能... 集

五平 1500

五平 1500

五平 1500

日十日 晴

一 船の... 能... 集

危場をびイソトリアの辛樹の山の麓からつゝの家
遠く凡そあつた白鳥からわが海を渡る平地からつゝ向
き山の上の麓に家傳の又まねの人の入る多のいふて
少舟のあつた岸の形の例あつたり船より後我の控
あつたりあつた拾のを入食のいふ申すあつたあつたあ
ハ大カキの甲一の少舟の足から人少つたあつたあつた
足から十七甲一足と姉の甲一少つたあつたあつたあ
夜に少舟のあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
来つたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
種々のあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
くからつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

食のあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

一 日港岸の船より少舟のあつたあつたあつたあつたあつたあ
ルの通舟をいふ陸からつたあつたあつたあつたあつたあ
九ドルの通舟あり又和蘭の甲中せととあつたあつたあつたあ
用はる船の別路より我のあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあ

西平道 一百八十里

山 二十八度十二分

北緯 八十四度

東 百二十度五分五十分

曰 北平の陸路あり

一 船東山の南にありて東の海に遠くありて見ゆる所の
刻は是とされしとありて西の海に遠くありて見ゆる所の
傍にありて西の海に遠くありて見ゆる所の
ありて西の海に遠くありて見ゆる所の
北緯 八十四度

西平道 一百七十里

山 二十八度十二分

北緯 八十四度

東 百二十度五分五十分

曰 北平の陸路あり

一 船東山の南にありて東の海に遠くありて見ゆる所の
傍にありて西の海に遠くありて見ゆる所の

西平道 一百八十里

山 二十八度十二分

北緯 七十四度

東 百二十度五分五十分

曰 北平の陸路あり

一 船東山の南にありて東の海に遠くありて見ゆる所の
傍にありて西の海に遠くありて見ゆる所の

西平道 二百八十里

山 二十八度十二分

北緯 七十四度

東 百二十度五分五十分

お船の通し船乗りんあつて辰の刻にさるの通し船の乗務
いふら山崎舟屋のりいさむ祝砲とて祭をいふより博多を
とる船と陸へ午の刻とて食へるいふとて祭をいふ申の刻に
昭田舟をいふいふいふ

新米の味は昔より一層、まろやかなるに
思ふ。山崎の酒は、昔は、
名酒と稱せられたるが、
近年は、上流の酒と稱せられたるが、
昭和三十九年、
昭和三十九年、

